



安栗郷土研究会報

 No.24

41・2・10
 兵庫県安栗郡
 山崎町
 教育委員会内
 安栗郷土研究会
 電話 750 番

四国巡拝の悲劇

黒田 義隆

△ 寺往來の交付を受けて

右の者、代々禪宗当寺且那ニ紛れ御座なく候。この度心願に付、四国大社巡拝に罷り出で候間、所々関所滞りなく御通し下さるべく候。行き暮れ難義の節は、一宿御当て下さるべく候。萬一、病死など仕候とも、国元へ届けにおよばず、其の所の御作法に御取計らひ下さるべく候。後日の為め往來手形仍つて件の如し。(書き下し)

これは、佐用郡三日月森伊豆守領分安栗郡青木村(現、山崎町青木)の百姓亀蔵の往來手形すなわち旅券であり、一種の身分証明書でもあつて社寺や靈地を巡拝する庶民の旅行者には且那寺の手形によつて通行が認められ、関所や番所の通過が許された。

手形というのは証文とか、証明書のことであるが、なぜ

目次

四国巡拝の悲劇	黒田 義隆
随筆 青蓮寺	安田八重子
郷土山崎礼讃	福井 託二
鴻野 考	安井 俊二
資料 山崎町と唱ふる場所	
本多藩滞京日誌 (三)	安井 淳三
山崎町郷土館の建設にあつて	
雑報	12
会報	12

それを手形というかについて「好古日録」に次のように説明がある。

手印、古昔文券上ニ手掌ヲ印シテ証トセシヨリ世俗文券ヲ手形ト云、其文券今稀ニ存ス、又婦女ノ押字スルコトアタハザル者ハ指節ヲ姓名ノ右傍ニ写ス、手形ノ一変ナリ

すなわち、その文書の正確なことを証明するために自己の手掌をその文書の上に押捺したのである。水無瀬神宮(大阪府三島郡島本町)には承久の乱後、隠岐に遷されてその地に崩じた後鳥羽上皇の手掌を印した置文があり、正倉院

文書には指節を記したものがあつた。

亀蔵はかねてから四国霊場や大社を巡拝したいという心願があつたので、且那寺の臨濟宗恩沢寺（上寺町）から国々御関所、所々村々在町御役人中あての前記往來手形の発行を受け、文久二年二月二十一日（一八六二年三月二十一日）家族六人を連れて巡拝の旅に出た。家族六人というのは、同人女房みき三十四才、倅安蔵十才、同鹿蔵五才、娘ひの八才、同さく六才、同ゆき二才で、亀蔵は六十四才であつた。年老いた亀蔵は、若い妻と子供たちをつれて榮しく出発したであろう。苗代前の農閑期を利用するため、春まだやや寒いころであるが出かけたのであろう。また、この時期が丁度四国八十八カ所巡礼のである時期でもあつた。しかし、子供は十才を頭に男二人、女三人、計五人で、しかもまだおしめの入用な数え年二才の幼児も連れていくのであるから大変な苦勞であつたのではないかと思われる。亀蔵はかねて持病があつたらしい。それを、四国巡拝をして仏恩、神威によつて治癒を祈ろうとしたのではないだろうか。昭和の初めのことであるが、安栗郡の旧村長であつた人が中風にかかり、四国八十八カ所を巡拝して、病気の固まつた人があつた。

亀蔵らは三月二十二日に備中国賀陽郡下高田村（現、岡山県吉備郡足守町下高田）を通りかかった。出発後すでに一カ月を経過しているので、恐らく四国をある程度巡つて

備中吉備津宮にも詣でてきたのであろうか。丁度夕暮れになつたので、その神社の拝殿で一宿した。この日は陽暦に換算すると一八六二年四月二十日に相当するから、拝殿の構造にもよるが、さして寒いことはなかつたであろう。一行は、翌二十三日出発したが、まだその村内の横路というところで、亀蔵は持病が起つて歩くことができなくなつたので途方にくれていた。

△ 旅に死す

丁度そこへ村の百姓らを通りかかつたので救助を頼むと早速村役人がやつてきて調べた上、喜七衛門の家へ移らせ、医療や看病も念入りにして世話をしてくれた。持病は何であつたかわからないが、手足が引付け、歩向困難とあるから、軽い脳溢血であつたと思われる。

亀蔵は路用の貯えもなくなつたため、巡拝を中止して帰国したくなつたので、村継ぎにして送り帰して欲しいことを、発病後二日の同月二十五日に亀蔵夫妻の連名で下高田村の役人中へ願ひ出た。その願ひは早速聞入れられた。亀蔵らの一行が備前国津高郡天満村（岡山県御津郡御津町天満）まで来たとき、亀蔵はついに旅中に不帰の客となつてしまつた。遺族は仕方なくその所の規則に従つて仮葬にしてもらつた。（津山經由で帰る積りであつたようである）芭蕉も「古人も多く旅に死せるあり」と「奥の細道」にしているが、思えば往來手形に「萬一病死等仕候とも

国元へ不_レ及_レ届ケ、其所之御作法ニ御取計可_レ被_レ下」とある不吉な条件が、悲しくも事実となつて現われた。旅先で幼い子供たちに取囲まれて死んでいった者は死に切れない思ひであつたであらうし、遺された家族は杖とも柱とも頼りにしている夫であり父である人に死に別れ、余りの突然に忘然としたであらう。

江戸時代の規則では、もし行路病死人ができて、引取人もなく、どこの者ともわからぬ場合には死体を仮埋めにして人相、年令、着衣と死亡していた状況、月日などの委細を書いた立て札を村外れに建てておく一方、その筋へ処置を伺いでる規則であつた。(「細書」)

寛政七(一七九五)年阿部伊勢守領分備後国深津郡坪生村(広島県深安郡神辺町)へ四月十八日辰九ツ頃(十二時)旅人の病人がたくらという釣台よりのものに兼せて村継ぎにして送られてきた。同村役人が調べたところによると、阿波国板野郡宮川村(徳島県板野郡土成町)からの送り状によつて送られてきた。この者は伊勢守領分品治郡雨木村(広島県芦品郡駅家町)百姓要蔵という者で四国巡礼にでていたものであつた。右の次第によつて坪生村では村継ぎにして同領分の安那郡上竹田村へ送り届けた。同村役人らが調べた処、病氣らしいがそれ程氣遣わしい様子でもなかつたので、食物を与え、人足利兵衛と長十郎とにこの病人を渡し、下竹田村へ送つてやつた。所が途中で病氣が重く

なつて死亡した。人足の一人が上竹田村へ帰つてきてこれを知らせたので、両村役人が立会いで調べると、病死で外に怪しい所はなかつた。年令は二十五・六才。着衣は上に浅黄形付木綿単物、間に空色木綿裏浅黄木綿布子、下に水色紺縞木綿単物を着、白木綿の下帯をしめ、鼠木綿形付帯が一筋脇にあり、紺木綿の胸掛一つとその他に所持品があつた。阿部伊勢守から御用番安藤対馬守に伺いを立てると次の指令がきた。

死体は最寄りの寺院に仮埋めにし、村外れに六ヶ月間立て札を建て、尋ねてくる者がなければそのまま土葬にし、雑物は死体を取扱つた者に取らせるようにせよ。(「三秘集」)

封建時代に、行路病者を村から村へ運んで、その郷里まで送り届けてやる人道主義の制度があつたのである。

この伺い書によつて行路病者の実際の





各種自動車
装塗と金鍍

伊藤拡播社

国道二十九号路線

電話山崎八一〇番
(夜間)三二一番

取扱いのほか、心理状態もややわかる気がする。また道中の着衣についても知ることができて興味がある。この要蔵は、はるばる阿波国から海を渡つて備後まで村継ぎで送られてきたのだが、苦しく悲しいことであつたらう。しかも郷里まであと二、三里の近くまで帰つてきたのに淋しく死んでいつた。気のゆるみもあつたのであろう。

発病した亀蔵も、おそらくこの例のように、釣台のような急造の寝台に乘せられて村継ぎにして貰つたのであろうと思われる。下高田村は岡山市の西北で吉備郡の東北隅にあり、津高郡天満村はその北方一里半ばかりで、郡境は五百米ほどの山続きである。亀蔵は出発した日に死去したのであろう。

遺族六人は、四月一日七ツ時(四時)に青木村に帰りつた。天満村からわずか数日で帰つてきた。四十日前には一家揃つて楽しく旅に出たのに、今はしよう然と帰つてきた妻と子供たちであつた。青木村庄屋牲川民右衛門、年寄

織右衛門、宗四郎から送り物帰村届書が春名文太郎をへて郡の奉行所に出された。

本稿執筆に當つて本会副会長安井寅一氏、神戸新聞特別調査室檀上重光氏、明石市立天文学館河野健三氏らの皆さんからお世話になつたことを厚く御礼申し上げます。

随筆

青蓮寺

島下八重子

御前さん 御膳お上り

おかずは何にも無つしよ(納所)さん

小僧は 香こでこらえとけ

と、遊び場を取り上げに来た小僧さんに悪たれ口を叩いたりして、大正時代の青蓮寺は山崎町東部の子供達にとつて、無くてはならぬ所であつた。

日蓮宗で、御前さんとお呼びしている偉いお坊様は、権僧正だとか教えられたが、木目の美しい玄關の式台で、小豆と足袋の小はぜのはいつたお手玉を、

おじやみ おひとつ おふたつ

と、はやしながらもてあそんで

「やかましい。御前様の邪魔になる」

と、追い立てに来るのは大低納所さんだつたから、御前様

のすべすべと磨き上げた白いお顔や、涼しいそり立てのお頭を拝することはほんとうに稀であつた。

春は本堂の前の紅梅の蔭の手水鉢で、へりのくぼみに水を溜め、少し軟かい色石をどしどしやつては薬屋ごつこをしたり、秋は鐘つき堂をぐるぐる廻つてどんぐりを拾つたり、石蹴り縄飛びと、きやあきやあ騒ぐのだから、お寺は本当に迷惑なことであつたらう。殊に夏休み中は、油蟬やみんみん同様、朝から晩まで子供の声がしていたといつてもいい程で、稲荷堂などは金の珠をくわえた狐を従えて、額のお稲荷さんの眼が、夕ぐれのうす闇に一際怖く見えるまで空箱の御殿に人形を寝させたり坐らせたり、女の子達が余念なく遊んだものであつた。

サーカスが天幕を張るのも青蓮寺、相撲が興行するのも青蓮寺で、瓦を置いた白練塀に、亭々たる松の緑がふさわしくて、街道から少し奥まつたところにある乳鋌打つた表門には凜とした風格があつた。

お霊屋たまごと呼んで子供達に近寄ることを許さなかつた場所は、藩主の墓所でもあつたのであろうか。遠く隔へだたつて思えば、鐘の聲、太鼓の音と共に、仏前にトーンボールのように華やかに積み上げてあつたお会式の餅の、鮮やかな赤や青の色が只々なつかしい。どんな拍手でよばれたのだつたか、御前様の下されものとして、夏冷たい咽喉越しを喜んだ飲みものは、みかんの皮を煎じて砂糖を入れたも

のだつたとか、オレンジジュースを飲む度毎に思い出す。

又、年老いて関係もない故人の事蹟などを心惹かれて読むことも多くなつたが、そんなとき、まるで夢のように思ひ越こす手紙もある。江戸の旗本から当時の御前様に宛てて、河合又五郎の一行を世話してくれとの依頼状であつた。見た場所はどこだつたか、うす暗い中で紙の白さといよいよ冴えさせていた墨の色、その中に書かれた四郎五郎とかいう名の珍らしさに、姉に説明を乞うた記憶が微かにある。荒木又右衛門や渡辺数馬に伊賀上野で討たれずに済んだなら、幾重の山をはるぼろ越えて、この静かな寺にたどりつけたであろうのにと、後悔と不安に震えたであろう人等を何か憐れに思つたことだつたが、青蓮寺は糸を入れれば面白い物語がたくさん浮き上つてくる海のような気もする。夏の夕暮れに、素麺に添えよと納所さんがちぎつて下さつた青柚のような、香り高い話を秘め持つ古文書もあるかもしれない。早く手入れして朽ちさせないで欲しいと、私は願わずにはいられない。

生谷温泉

!!
憩い
山
涼
荘

電話山崎二〇六番

郷土山崎礼讃

福井託 二

それ大山崎の開く往昔の柵ノ庄を以てす。北高南低の地の利を占めて、丹青によし奈良の都のそれにして、万象中庸の氣を存す。国道の改修すでに成り時余にして京阪に達す。古來人の和、地の恵み豊かに天変地異言うに足らず、奥の森林は町の加工と組んで愈々繁榮の一途を辿る。遠近の諸人好地に群集して商工業の隆盛は城下平野を蚕食し、日毎数増す煙突の黒煙に民のかまどの賑いを示す。むべなるかな今日全国県町の首位を誇る。昔天正年次熊見蔵人が悲憤のこす篠の丸を北に背負い、南面山裾に備中高松より歎請の稻荷を祠る最上山在り。まこと雪月花四季の絶景近隣に比なく、優に洛東清水の舞台を凌ぐ。加うるに由来最上の名鐘余韻嫋々として、日に三度鳴らさるなく、げに桜

花爛漫たるの時、花に生まるゝ鐘の音をしたいて詣人花蔭を余す処なし。望みて東方に一起伏あり、愛宕山と称す。ふとん着て寝たる姿の東山に彷彿たり。時に仲秋名月この山後を出で、限なく、待望す最上の月客こゝかしこにたむろして冥暎に及ぶ。愛宕の山頂は天正の昔、羽柴が長水の宇野に矢文を放ちし処、山麓に出雲神との伝説に名高きひちりきの宮を安置す。後方そびえしは高取山にして、城下平野を距て、両方国見山に相對す。共に頂上より瀬戸内海の航舟と広畑製鉄の煤煙を望見す。左指呼の内に揖保の青帶南流し、眼下に点景するは岩権現、生谷温泉、津能橋、十二人波、荒井の堰に春日森、東洋建材大煙突に水源地、衣坂地藏太神宮、宍粟大橋渡りすぎ白壁光る願壽寺の河の此方は狐森、稻垣神社に貴船森、この道や行く人なしの芭蕉塚、舟元長敷須賀渡し、庵寺過ぎて恐ろしき、底無し深淵野の鎮守、新装モダンに架け渡す山崎大橋西にして噂に聞きし小堂は鶏足寺跡らし観音堂、遠くに見ゆる戸原橋、大屋根高き西光寺、上比地八幡比地山社、中井権現、鶴木金比羅、比地の滝、金谷藪寺、段観音、春安天神、木谷鎮守、西山裾の中寺は旧藩侯の祈願所たり。足下に見ゆる寺社問へば、明源光泉青蓮寺、大雲妙勝泉竜隨陽寺、大才恵比寿荒神総道社、右下はその名も優し弁天の池を距ててかしくも我がうぶすなの鎮座ます、八幡宮の在わすなり。ここにかしこみ敬いて山崎絶景おこがましくも讚辭被歴し奉る。

鴻野考

安井俊二

安栗郡山崎町のうちに、小字（あざ）で鴻野というところがある。場所は、その昔地獄谷といつて県下に名を轟かした今の鴻野町と称する一帯で、旧国道の東と西に続いているのである。鴻野又は鴻野口と称する土地台帳上の小字の地名は、大字の上寺、庄能、今宿、山田の四部落に跨つて同字が使用され、場所もそれぞれ隣接している。一寸珍しいケースである。例えば、垣内とか河原などつく地名はどここの部落でもあるが、鴻野はめつたにない字名であり、しかも、四部落にまたがっていることは確かに異例である。その土地の現状をたどつてみると、東の方は山田町の青蓮寺裏から北へ町上水道水源地の西衣坂に至り、ここからカブして北西に、大神宮神社の裏の方を西に廻つて、旧国道二九号線を渡つて、西の端大歳神社まで。大歳神社から南へ大雲寺の東門あたりの三谷氏裏の北側の道を東へ直線に新富座の前を通つて鴻野町の谷口氏邸の南の道を少し東へ行つたところで、所謂十六軒長屋前の道を南へ折れて、出水町の林商会の裏手あたりから東へ、すぐ南に曲折して雲田氏方の西の道を真直に山映館の前に出る。山映館の南側を東にとると青蓮寺裏の起点に戻るわけである。

その面積を大凡見当つけると、上寺分二千坪、庄能分一万坪、山田分一万一千坪で、三万五千坪程度と計算される。鴻野の土地は、山田、今宿及び庄能の東並に北側の土地より一段と高くなつていて、ぐるつと断層になり、青蓮寺裏から南へ鹿沢の突端を西へ延びて段部落の土地まで切岸が続いている。この岸を湖水の所と見立てて、南方及び東方城下平野一帯を一大湖水であつたとみなし、川戸、平見間が陥没して平地を出現したという説もある。勿論遠い昔々のことであつたと仮定しての話である。

ここで、山崎町（合併前の旧山崎町）の成り立ちを振返つてみたい。山崎町は、十六世紀の末頃から十七世紀の初めにかけて町作りが始められた。これは、天正十二年に木下勝俊が、山田、山崎村に新町を作れと令書を出しているから確かである。尤もそれまでに、篠の丸、長水城があつた。大体十四世紀の中頃に築城、広瀬氏九十年、宇野氏百十年の間（広瀬氏と宇野氏の間）に再建まで約三十年間あるが）は、都多谷の上町、神野の五十波あたりが町であつたことは当然で、山崎近辺は、東に山田村、西に山崎村があつて極めて貧弱な農村であつた。天正八年（一五八〇年）に長水落城という大事件が起つたので、山崎の地は脚光を浴びて登場、地理的要地として認識を新たにし、町作りとなつたものである。これは、戦術の変化、山城の時代遅れなどの諸条件が幸したこと勿論である。元祿時代に書かれ

（今宿分二万二千坪）

青果
海産物
食料品

八百福商店

山崎町 山田
電話 四一三番

た片岡醇徳の「守令交代記」に

当町は、山田村、山崎村とて、農民散居せしに、町並に家作りいたさせ、山田町、山崎町両町打続き初て一筋の新町となる。

と、当時の状況を伝えている。その後の進展ぶりを簡単に紹介すると、元和元年（一六一五年）に池田輝澄が安栗五万石領主として鹿沢に居を構え、城下町として発足した。早速山崎町の北裏通りに魚町（北魚町）富士野町、紺屋町、大雲寺町（寺町）籠の町（茶町）とでき、寛永八年に佐用郡加増あつて、佐用町（西新町）門前町と西に新町が加わつた。山田町の北側には高野町（福原町）ができるという発展ぶりである。寛永十年（一六三三年）に町中の旧農家を全部東の田圃の中へ移転せしめて、田町（山田）とした。その後、領主交代などあるわけだが、元祿十二年（一六九九年）福原町の東より出火、大火となつて山田町、北魚町東半分と、そこから北部の町は全部焼失したことがある。

この際に焼失地区の区画整理をして、出水町などが出来たわけだが、とにかく明治迄城下町として栄えたと云うべきだろう。

ここで、十七世紀初め頃の鴻野という土地を考えてみると、一段高いところで、水利はなし、田圃にはならぬところ、まあ原野のような状態であつたとみなすべきだろう。大体鴻野の地名は高野で、高い野原の意味であると断定したい。だから「ここの」という呼名が行なわれていたのだと思う。兵庫県鳥になつた「コウノトリ」の栖息していたとは思えないから、同音文字で鴻野と使用したものである。前に書いたように、福原町の元の名が高野町で、これが池田輝澄家臣福原小左エ門が居住してから、福原町と呼び名が交つたと伝えられている。この高野町の名も同一根拠であると思う。

なお、西の端の上寺分とそれに続く庄能の一部は、鴻野口とつけられているが、旧国道二九号線と衣坂の道路がつけられるまでは、出入り口が大歳神社近辺よりなかつたと思われるから鴻野口という名称がついたのであろう。

参考までに、明治時代の村名表を繰つてみると、岡山県児島郡に鴻村あり、高野村は次の各郡にあつて計十ヶ村である。福島県北会津郡、同県東白川郡及び田村郡、茨城県北相馬郡、埼玉県北葛根郡、富山県中新川郡、滋賀県愛知郡、和歌山県伊都郡、京都府加佐郡、岡山県苫田郡。

資料(兵庫県史料)

内閣文庫蔵

山崎町卜唱フル場所御届

当区山崎町卜唱フル場所取調可申出段御達ニ付取調別紙
尙通進達仕候。
以上

第十六区一小区

区長 安原昭之 印

明治八年十月三日

飾磨県権令 森岡昌純 殿

一、山崎町

山田町 本町 西新町

門前町 北魚町 福原町

出水町 富士野町 伊沢町

紺屋町 寺町 六軒町

旧藩清水口 江戸町 桜町

本多町 通り町 中ノ町

松原町 三軒町 東西拾丁

南北六丁

一、町数十八ヶ所

戸数七百三十三戸

一、人口 二千九百十五人

内

男 千四百七十人

女 千四百四十五人

但し外ニ山崎村ナルモノアリ、戸数拾八戸 人口五十九人

西新町本町北魚町ノ三町ニ接ス

右之通御座候

以上

第十六大区一小区

安原昭之

明治八年十月三日

実粟郡山崎町

(大正九年第一回国勢調査)

人口総数 五、六四九人

内 男 二、五二二人

女 三、一二七人

世帯数 一、一七七戸

山崎町 世帯数 一、一七七

北魚町 五、二一九

(女百に対する男八〇・六五)

なお、昭和四十年十月一日国勢調査人口は次のとおりである。

人口総数 二五、六八三人

内 男 一二、〇九五

女 一三、五八八

世帯数 五、九四七戸

但、旧山崎町に限ると

人口総数 七、九二七

内 男 三、六三八

女 四、二八九

世帯数 二、〇五三戸

(以上黒田義隆氏提供)

明治元年

本多藩滞京日誌 (三)

(御近習頭 柴田小膳手記)

◎ 一月 六 日

一、今日五嶋飛彈守様より御着京御歎の為御使者到来

一、明七日白馬節会に付朝六ツ時御参内仰出られ例の通り

御横目中へ相達尚夫々へも申達候

但し御供廻り三騎は乗り切り外御先御道具等は御先へ

九つ迄参り候事以来此御例に被成候

金物と建築材料なら

何でも揃う

塚本金物商会

山崎本町・電話六八番

一、山崎寿丸様年始の為御祝詞御支関まで入らせられ候

◎ 一月 七日

一、三日月様より此間年始御祝詞に入らせられ候節は手狭に付御客様御断りに相成右は失礼を御断の為御使者到来

◎ 一月 八 日

一、明九日御当番に付朝六ツ半時御出被仰出夫々相達し候

◎ 一月 九 日

一、今日は御着服御直垂に付朝六半時、木村筑後介罷出御装束の上同刻御直垂にて御参内御当番無滞相すみ御帰館あり其儘戸田銃五郎様御旅宿へ入らせられ酉下刻御帰館被遊候

但し今日御供廻り三騎は乗切り如例

一、植村剣八郎様御上着被成候

◎ 一月 十日

一、昨日本多平八郎様御着京の趣今朝御知らせ有之に付即刻御着一折為御歎持参、御使者当段之を勤む

一、御交肴一折植村様へは小納戸佐川武馬御使者にて相勤候

一、桜井遠江守へ御菓子被為進候御使者前同様

一、若様御機嫌克被遊御超歳候御悦申来候に付早速披露申

上候

一、岡崎様より御使者を以て御菓子御到来

一、黒田小将様為御祝詞御玄関迄被為入候

◎ 一月十一日

一、明十二日四ツ半時御出被仰出夫々申達候

(未完)

山崎町郷土館の建設にあたりて

安井淳三

山崎町長井口光司氏のご熱意によつて、郷土研究会員が長らく待望いたしておりました郷土館が、いよいよゆかりも深い鹿沢城屋形跡(現山崎小学校北校舎跡)に建築されることになりました。

この郷土館は、旧山崎管林署本庁舎と附属建物を町が買収し、これを新たな設計のもとに移築改装するもので、その内容は、木造瓦葺平家建 約七十坪のうち二分の一程度をそれぞれ郷土館と図書館に分離し、堅牢な防火壁、盗難

防止設備を施す予定であります。また、旧山崎管林署庶務課長官舎、木造瓦葺平家建約三十坪は、これまた新たな構想のもとに、青年、婦人の集会の場として社会教育振興のために提供する予定であります。

郷土館には、会員の皆様方も御承知のとおり、本多侯の鎧、かぶと、大刀、大阪夏の陣出陣の血染の陣羽織、古文書、その他の貴重品、八幡神社の宝物、故吉川英治寄贈の山崎闇齋先生の木像をはじめ、旧士族、旧家の保存されている蔵品のかずかずを一堂に陳列、保管し、町民はもとより広く外客にも観覧していただき、山崎の歴史を紹介し、往時をしのぶ文化施設とする予定であります。

山崎町には、文化的な団体として、郷土研究会、昭和会短歌会、冠句会をはじめ、先般新たに誕生した実粟民謡文化連盟と、それぞれの立場で地方文化の高揚と発展のために日夜ご尽力賜っておりますことは、誠に感謝にたえないところで、文化来るところ、文化不毛の地といわれ、文

金融 日輪商事株式会社

山崎町 今宿
電話 五五二番

化的施設の乏しい山崎町において、郷土の歴史を見直し、文化活動のセンターとしての各種施設が誕生いたしますことは、ほんとうに関係者としてよろこばしいことであります。

近く縦貫道路も城下地内を通り、また近い将来には、山崎小学校の第二期工事も行なわれ、現在の中校舎、南校舎が移される時期が参ると思いますが、その跡地を総合的な文化センターとして町民の憩いの公園として、山崎町の観光地として悔いを残さない全体計画の樹立が大切であろうと思ひます。

雑報

☆ 山崎町の郷土館もいよいよ今春着工、別掲のとおり図書館と併設になります。郷土の土器、石器、その他資料文書等町民各位の史料を委託展示できることは、大きな朗報です。郷土文化の前進であります。御協力下さい。

☆ 遅すぎると言われていた山崎観光協会も、来る四月一日正式に発足を決定。会長井口光司氏（町長）、副会長武藤林之輔氏（町会議長）、壺阪寿氏（商工会長）以下理事を選任して、活潑に活動することを申合した。

会報

● 昭和四十年十月十七日、山崎關齋神社秋季祭典を同神社で執行。井口山崎町長はじめ奉賛会及び郷土会役員ら多数参列、西鹿沢地元の協力を得て盛大に挙行された。

● 同日神社境内の關齋会館で、本会定例総会を開催、決算報告、事業行事報告等あり、役員任期満了による改選を行なつたが、全員再選と決定。

● 本会春季見学旅行は、五月十五日の予定になつております。昨年計画して、フェリーボートのストの為に中止した淡路行を執行します。いずれ案内状は、四月下旬に差上げる筈ですが、どうか御賛同下さいまして、御予定に入れておいて下さい。



タクシーの御用は

篠陽タクシー

電話 五七番